

< 付属書 >

付属書1. 狂犬病の疑いがある動物の症状と特徴

狂犬病が疑われた動物は、臨床診断を行う前に（１）飼い主が明らかであるか、（２）ワクチン接種が適切に行われていたか、（３）過去に狂犬病流行地に滞在した期間があるかなどの「疫学情報」を正しく知ることが重要であり、診断には捕獲隔離後の注意深い経過観察が必要である。

狂犬病の発病経過には「前駆期」「興奮期」「麻痺期」の3期があると言われているが、「興奮期」の期間が非常に短く主として「麻痺期」の症状を示す場合がある。また、動物では人と異なり、「恐水症」を示さない。

狂犬病を発症した動物の初期症状として最も重要な所見は「性格や行動の変化」である。普段あいそがいい動物の気性が激しくなり噛みつく傾向を示したり、それまで親しくしていた飼い主の知りあい等を避けるようになったり、臆病であった動物が遠慮なく人に近寄るようになるなどが挙げられる。一般に「前駆期」では、早期一過性の発熱、憂鬱、倦怠、恐怖心による興奮と飼い主に対する反抗、遠吠え、瞳孔散大、異物を好んで刺激に応じて咬む、被咬傷部の搔痒などが見られる。

自然感染した犬とネコの症状はほぼ同じであるが、ネコでは犬よりも「興奮型」を示す比率が高く攻撃性が一般的に認められる。潜伏期は1週間から1年4カ月と多様（平均1カ月）であるが、いったん臨床症状が現れると死亡するまでの期間は短く15日を過ぎることはまれである。ウイルスの唾液中への排泄は一般的に発症の3日前に始まる。咬傷事故を起こした犬やネコを隔離した後に2週間以

上の観察を行い狂犬病の発症が見られなければ咬傷を受けた人への暴露後発病予防の中止が可能となる。この判断は家畜や野生動物には適用されない。

野生動物では、特に「行動異常」が最も重要な所見であり不自然に人と接触を試みる場合や夜行性の動物（コウモリ、アライグマ、キツネなど）が日中に現れる場合に狂犬病を疑う必要がある。特に、挑発を受けていないのにも関わらず攻撃を加えてきた動物は挑発を受けて攻撃を加えてきた動物よりも狂犬病である可能性が高いと考えられる（野生動物や家畜に餌を与えようとする行為は行為者の挑発行動と考える）。

狂犬病の鑑別診断において注意される疾患には、犬のジステンパーが第1に上げられるが、現在では血中のジステンパーウイルス遺伝子をPCR法により証明することが可能であり鑑別が容易と考えられる。また、犬がジステンパー流行地域に生活していたかの情報は判断の一助になる。これ以外には、中枢神経系に作用する薬物中毒（ストリキニーネ中毒、鉛中毒、有機リン中毒）が考慮される。

以下に、狂犬病を発症した犬とネコの臨床症状の特徴について列記する。

「犬の狂犬病」

1. 前駆期（一般に2～3日の経過をとる）

- ・ 性格の変化と行動の異常（挙動不審、気まぐれ、過敏、疑い深い目付きをする）。
- ・ 恐怖心による興奮と飼い主に対する反抗。遠吠え。

- ・ 異物を好んで刺激に応じて咬む。
- ・ 被咬傷部の搔痒。
- ・ 性欲の亢進。
- ・ 早期の一過性発熱。
- ・ 憂鬱。
- ・ 倦怠。
- ・ 瞳孔散大。

2. 興奮期

(一般に1~7日の経過をとる：この期間が短く、すぐ麻痺期に移行する場合がある)

- ・ 落ち着きがなくなり興奮状態となる(無目的な徘徊、目に入るものを頻繁に噛む傾向を示す)。
- ・ 異嗜(小枝、わら、石、土などを食べる傾向の多発)。
- ・ 喉頭筋組織の麻痺によるほえ声の特徴的な変化(嘔声、長吠哀哭)。
- ・ 光や音(視覚、聴覚)の突然刺激に対する過敏な反応。
- ・ 流涎および咽頭筋肉の最終的麻痺による嚥下困難。
- ・ 顔貌の険悪化
- ・ 筋肉組織の攣縮
- ・ 角膜乾燥
- ・ 初回の痙攣発作中に死ななければ、麻痺段階に入る。

3. 麻痺期(一般に2~3日の経過をとる：犬ではこの症状が最も多い)

- ・ 全身の麻痺症状による歩行不能(後躯の麻痺が良く観察される)。
- ・ 咀嚼筋の麻痺による下顎下垂とこれによる嚥下困難。

- ・舌を口外に垂らしながら流涎。
- ・むせるような発声音（しばしば、犬ののどに物が詰まったと判断して人が取り除く行為を行いウイルスに暴露される）。
- ・昏睡状態となり死亡。

「ネコの狂犬病」

ネコにおける狂犬病の臨床像は、犬よりも攻撃性がより一般的に認められること以外は、多くの徴候が犬のそれと類似している。

1. 前駆期（一般に1日の経過をとる）

- ・性格の変化と行動の異常（正常な行動からの突然な変化：平常時に不機嫌ですれたネコがより機敏となり、落ち着きがなくなり、注意深く、親しげになる一方で、愛らしいネコが突然挑発されることなく引っこいたり、噛んだりして、うつ状態になり、暗い場所に引っ込んで隠れようとする）。
- ・性欲の亢進（雄ネコではペニスの持続性勃起が見られる）。
- ・瞳孔散大。
- ・結膜反射の消失。

2. 興奮期（一般に2～7日の経過をとる：ネコではこの症状が最も多い）

- ・筋肉の緊張増加、筋肉の単収縮、全身の筋肉の震顫、筋肉衰弱、流涎、神経過敏、被刺激性、攻撃性の増

加などの症状がひどくなる。

- ・ 目に入るものを頻繁に噛む傾向を示す。
- ・ 嚥下筋肉の麻痺により唾液がたまり流涎を起こす。
- ・ 痙攣は徴候が見えてからほぼ5日目に顕著となり後肢の麻痺が急速に進行する。

3. 麻痺期（一般に3～4日の経過をとる：この段階が顕著な場合は、興奮期がないかもしくは極端に短く、犬で見られる典型的な下顎麻痺または顎脱落の徴候を示すものはまれである）

- ・ 嚥下筋肉が早期に麻痺を起こすために飲食が困難となる。
- ・ 全身麻痺。
- ・ 徴候開始から3～4日以内に昏睡して死亡する。

補足）付属書1「狂犬病の疑いがある動物の症状と特徴」（P. 60）は、ハワイと英国から報告されている狂犬病発生時の対策に関する報告書、「ハワイ州Rabies Contingency Plan 2001」と「英国Memorandum on Rabies, Prevention and Control」の記載を中心に引用し、症状の詳細については、CDC狂犬病検査マニュアル「Laboratory Methods for Detecting Rabies」、南アフリカ共和国が制作した「ヒトと動物の狂犬病（狂犬病ビデオ）」、「獣医伝染病学」（清水悠紀臣、鹿江雅光、田淵 清、平棟孝志、見上 彪編集）「ヒトの狂犬病」（高山 直秀著）日本で過去発生した狂犬病の病状を詳細に記述している「狂犬病予防読本」（近藤正一監修、原田雪松著）と「東京狂犬病流行誌」（上木英人）などの資料を参考にした。